

経済と経営 29-2 (1998. 9)

〈論 文〉

異文化交渉とミディエーション
「カーター大統領の Dayton 和平交渉への調停工作」

御手洗 昭 治

「序 文」

旧ユーゴスラビア連邦は六つの共和国、五つの民族、四つの言語、三つの宗教の同居するモザイク国家であった。強調すべき点は、旧ユーゴの大半がスラブ系民族であるため、互いが親戚関係のようなものである。冷戦時代は社会主義国として、チトー政権下ではまとまりをみせ人々は共に過ごしていた。しかしながら、徳永彰作も指摘するように旧ユーゴスラビアにも東欧の民主化の波が押し寄せたため、1989年には共産党の独裁体制が崩壊し国が分裂する結果となった。

1992年1月に73年に及んだ多民族国家ユーゴが解体して以来、国際社会は東西の冷戦後最大の民族紛争に対して和平現実のために積極的に取り組んだ。折衝による和平的解決か武力行使による解決を目指すのかで方針が揺れた。1994年春から国連とヨーロッパ連合(EU)に代わり米国を中心とした北大西洋条約機構(NATO)の積極的関与が顕著となった。1995年8月には、米軍を中心とするNATO軍がセルビア人勢力に空爆を開始。セルビア側は大打撃を受けたが、一方でクリントン政権はセルビア人勢力を「交渉」のテーブルに着かせることに成功した。この結果として、アメリカ主導の「和平停

戦交渉」に積極的に臨む姿勢を見せた。しかしながら、一方では 1994 年の 12 月にジミー・カーター元大統領がミディエーター（調停）役として、最初にイニシャティブを取り停戦和平に向けて水面下で活動を展開。それが突破口となり和平を作り出すきっかけとなったが、同氏の功績は見過ごされがちであった（拙著「ボスニア停戦交渉とカーター元大統領のミディエーション力の一考察」を参照されたい。）。その後、紛争当時国首脳はアメリカの政治、軍事圧力の下で、停戦だけではなく難民の自由帰還から選挙、新政治体制まで包括的に合意し仮調停にこぎ着けることができたのである。

因みに 1998 年 7 月 18 日にはユーゴスラビア連邦セルビア共和国コソボ自治州紛争で、同州の分離独立を目指すアルバニア系武装組織「コソボ解放軍」部隊軍は、西部の町オラホツバの町を目指す大規模な攻撃を開始し、19 日もセルビア治安部隊と激しい戦いを繰り広げた。対アルバニア国境地帯でも過去最大規模の戦闘が起き、死者の数も百十名に達した。しかしながら、米英仏独伊ロ六カ国で構成する旧ユーゴスラビア問題の連絡グループが、ユーゴ連邦セルビア共和国コソボ自治州の民族紛争の平和解決に向けた「交渉」の土台となる文書をまとめ 8 月末までにはユーゴ当局とアルバニア系住民指導者の双方に伝えた。これは、イギリスのドネーリー駐ユーゴ大使がミディエーターとなり両者に手渡されたのである。

アルバニア系住民の交渉者によれば、「オプション・ペーパー」となる文書は、まず戦闘停止を実現することに重点を置いた上で、自治権付与やコソボの炭坑資源の帰属など交渉の焦点となりそうな論点を整理することになった点もここに記しておきたい。

以下では、まず外交交渉の形態に関して若干の考察を行い、その後、劇的とも言われた和平交渉合意のプロセス、仮調停の争点、欧州連合 (EU) の反応にも触れながらボスニア紛争を概観し、加えて英文で解釈を記し「異文化交渉とミディエーション：カーター調停外交」の研究覚書の一部としたい。

「交渉形態の種類」

国際政治学者の木村汎は「外交」は交渉による国際関係の処理であり、「交渉」は外交の主要の手段であると指摘する。交渉と一口に言っても様々な形態が存在し、その類型も大いに異なる。

交渉を交渉が達成しようとする目的の見地から分析すれば、次の分類が可能である。

- (1)[延長型交渉]：延長型交渉は現状維持を交渉の目的とする。例えば、文化協定や日米安保条約は、現時点で存在する状況をさらに継続したり微調整したりするのが目的とされているので、「延長型交渉」に属する。交渉の主たるテーマは、[a] 従来 of 通常な状態の延長。[b] 従来 of 合意が、先例として強い影響力を及ぼす。[c] 交渉が長引けば長引く程、双方にとって不利益という結果となる。[d] 万が一、合意に達しなかった場合には、現状が破壊される。[e] 以上の観点から、このタイプの交渉は合意や妥結に達しやすい。
- (2)[正常化型交渉]：「正常化交渉」は、現段階のアブノーマルな状態に終止符を打つことを目的とする。1951年のサンフランシスコ講話条約交渉や朝鮮戦争を終結させるために行われた板門店における休戦交渉などが、この種の交渉である。

「正常化型交渉」の特徴は、[a] もし交渉努力が行われなければ、異常(アブノーマル)な状態が継続し、交渉当事者達にとっても不利益が蒙る結果になるので、当事者間に交渉を積極的に促進し、紛争を解決しようとする心理が働く。

[b] 交渉者に対して、交渉を妥結させる方法で国内の世論やその他から強い圧力がかけられる。[c] 交渉が長期化すると、相対的に力の強い方が軍事力などを使用し交渉によっては獲得できない勝利を入手しようという誘惑に駆られる。[d] 双方の間で合意に到達しえない場合には、戦闘再開もしく

は、戦闘の規模を縮小させる暗黙の合意に到達されるかのいずれかとなる。

(3) [再配分型交渉]: 「再配分型交渉」とは、現状を変更して既に一度配分された価値を再び配分し直そうとする交渉と呼べる。この交渉では、利害の対立、攻勢に出る者と守勢にまわる者との間に、明確な区別が存在する。攻勢に出る者が交渉に成功すると、守勢側は前者の要求の全て、あるいは一部を呑むという「ゼロ・サム交渉」になり、現状の変更を導くこととなる。例えば、国際連合の安全保障理事会の常任理事国の数を変更をすべきとの提案がなされた場合を想定してみよう。守勢に立つ常任理事国側は、自分たちにとって不利な交渉にそもそも応じるであろうか。答えは「ノー」である。なぜならば、守勢にたつ者が守勢にたつ者に対しては脅かしの理論ともいえる脅迫の力をもっているからである。

因みに、インドの選挙戦たけなわの1998年2月初旬、「五大国にだけ核兵器を認めて他の国には認めない政策は、ばかげた脅迫になるということ」を大使（セレステ駐米大使）は本国に助言したほうがいい」とインド人民党のナイドゥ幹事長が発言したことがある。皮肉のこもったこの発言の裏側には、インドの「大国」としての自尊心があった。インドには、五大国の中国が核保有国として認知されているのに、自らは後発国としての核のオプションの制限を受けていることへの不満があった。国連安全理事会の常任理事国となって、多極化する世界の一極を占めるのがインドの熱望であったが、結果は「ノー」であった。

この種の交渉の特徴は、[a]交渉のテーマは、攻勢にたつ側に有利な利益の配分であること。[b]攻勢にたつ側と守勢に回る側との間には明確な対立が存在する。[c]攻勢にたつ側は、利害の再配分を狙う交渉にもかかわらず、それが正常化を目標とする見せかけの交渉戦術をとる。一方、守勢にたつ側は損害を先送りしようとするが、攻勢側の戦術によって再配分に応じることが正常化であるかのように思わされるようになる。[d]双方が、頑固に自己の立場を主張続ける場合には、交渉の合意はない。なぜならば、合意した場

合には、攻勢にたつ側の交渉の負けを意味する。

(4) [革新型交渉]: 「革新型交渉」とは、何が新しい企てをしたり新しい関係を創造することを目標とする交渉である。このタイプの交渉では、無から有を造りだすむずかしさが伴う。しかしながら、既存の障害物も存在しないこともあり、この点では交渉が有利に進むという利点もある。創造へ向けての共通の利益が全ての交渉当事者達の協力促進に貢献するため、自分（一国）だけが仲間外れになることの懸念が、かえって連帯感を生ませ交渉参加者のモラルを高め寄与する。欧州共同体(EU)や北米自由貿易協定(NAFTA)、それに米・ソの軍縮交渉などがこの種の交渉の典型的な部類に属する。この種の交渉は、[a]互恵的利益が得られる枠組作りや手続き、それに制度を新しく創り上げることができる。[b]交渉妥結のためには、相互利益の存在が力説されるが、ともすれば、そのような新しい枠組作りや新制度から排除されることによってもたらされるであろう不利益が警告される戦術を採用される。[c]革新に反対する人々は、この交渉がこの交渉が本来は革新ではなく、再配分を目指す交渉であると説く戦術を採用する。[d]交渉が長引く過程においては、革新の利益を享受したり、交渉の主導権をとる側が、当初の立場を変更する場合も起こりえる。

(5) [副産物型交渉]: 「副産物型交渉」は、必ずしも最終的な合意へ到達することを目的とはせず、メタコミュニケーションではないが交渉をすることそれ自体を目的とする交渉である。この種の交渉の特徴は、[a]自己の立場の正当化をアピールしたり、交渉妥結に熱心だというプロバガンダを展開する。[b]交渉相手との接触（交流ではない）を維持し続ける。[c]交渉相手の出方や戦略に関してのあらゆる情報を入手する活動を展開する。[d]交渉当事者以外の第三者に対して影響力を行使する。[e]交渉を拒否する場合に蒙るかもしれない実力行使を回避する。[f]交渉に従事しているように見せかける一方、戦争準備などの真の目的の意図を隠す傾向の場合もある。

本稿で取り扱う「ボスニア和平交渉」などは、(2)の「正常化型交渉」に該

当するが、旧ユーゴの領土の再配分が交渉の目的という意味の場合には、(4)の「革新型交渉」にも該当すると言えよう。次に Dayton 和平交渉合意プロセスを概観してみたい。

「Dayton 和平交渉合意過程」

1995 年 11 月 22 日、米国オハイオ州 Dayton のライトパターソン空軍基地で 22 日にわたって行われたボスニア和平準備マラソン交渉は、最終局面で劇的な展開を見せ平和への第一歩を検証した。同日、紛争当事者三ヶ国の指導者による包括和平合意の調印式が行われた。

報道関係の調べによる合意内容によれば、まずセルビア側が要求したポサビナ回廊拡大が拒否される一方、イスラム教徒主導のボスニア側に念願の首都サラエボの管理を認めるなど、事前の予想に比べセルビア側のボスニア政府に対する譲歩が目だったようだ。

セルビアのミロシェビッチ大統領が「内戦には勝利者はない」と述べ笑顔を浮かべたのに対し、ボスニアのイゼトベビッチ・ボスニア幹部会議長が「これは正しい和平ではないかもしれないが、戦争継続よりは正しい」と苦笑の表情で語った。

[11 月 1 日] に、三ヶ国による協議がオハイオ州の Dayton のライトパターソン空軍基地で始まった。当初、クロアチアの東スラボニア問題をめぐるセルビアとクロアチアの対立を解決するなど交渉は順調に進んだという。

[11 月 17 日] この日に交渉が最終局面に入った。アメリカ側の調停者であったホルブルック国務次官補の水面下での活躍が目だった。「直ちに帰国してほしい」……ホルブルック氏の要請を受け、クリストファ国務長官は、16 日に関西新国際空港に A P E C (アジア太平洋経済協議) 大阪会議出席のために着陸した時には、すでに滞在日程の短縮を決めていた。クリストファ長官は、17 日に Dayton に帰国し交渉の調停・仲介に入ったこの日からであった。こ

の時点で難民帰還問題などの周辺部分の合意は完成。その後、各勢力の支配領域分割などをめぐる大詰めの協議に入った。

アメリカは、妥協を拒み続けるボスニアのイゼドベゴビッチ幹部議長、それにクロアチアのトウジュマン大統領、そしてセルビアのミロシュビッチ大統領への圧力をたかめるため[11月19日]には同日を交渉の期限に設定。アメリカのバーズ国務省報道官も「どのような結果になろうとも、何らかのセレモニーを行う。それが合意の仮調印になるか、交渉決裂の記者会見になるかわからない」と交渉の現実に向かったの圧力作戦に出た。国務省は、仮調印式の式次第を作成し、スピーチの原稿作成まで手掛けていた。しかし、その直後、問題の争点のボサビナ回廊問題が交渉の一方から持ち上がり事態は暗転した。

[11月20日]には、式典の予定がキャンセルされ、ボスニアからは交渉決裂の情報が流出した。しかし、20日の昼過ぎには、セルビア側の代表団の飛行機が荷物の積み込みを始め、帰国の出発準備を開始。クリントン大統領にとっては、交渉の成否と来年度の大統領選挙が密接に絡んでいた。そこで、クリントン氏はクロアチアのトウジュマン大統領に電話をし妥協を求めた。そして、帰国を決意していた他の各代表を必死に説得し、20日夜には再び交渉の継続が決定した。

[11月21日]同日未明、二回目の徹夜協議が終わったころボスニアのサチルベイ外相が、いくつかの報道機関に「交渉は決裂した」と断言。このため交渉のみ通しは再度不透明と見えだが、その後の粘りの折衝が続けられた。

[11月22日]「和平交渉決裂」を際どく回避して、ついにボスニア和平は合意（仮調印）に達した。首都サラエボの市民の、久しぶりの笑顔がテレビで「これが最後のチャンス。和平を信じなければならない」と映し出された。

第二次世界対戦後のヨーロッパにおける最大の戦争であった「ボスニア戦争」。何度も裏切られてきた悲劇の街での実感が、衛星放送を通じて伝わってきた。

三年半にわたる戦闘で三十万人近い人々が命を失い、二百万人以上の人々が住む家や土地を奪われた。また強制連行、大量虐殺、集団強姦が続いた。

「民族浄化」(エスニック・クレンジング)という言葉も聞いた。異民族を排除すること、即ち「浄化」である。それが民族間の嫌悪、憎悪を煽り多くの女性や子供、老人たちが犠牲になった。

ボスニア・ヘルツェゴビナという「統一国家」の中に、イスラム教徒をクロアチア人からなる「連邦」とセルビア人による「共和国」が存在する。和平合意が定めたボスニアの新たな政治体制は実のところ複雑である。サラエボの位置付けも例外ではない。

この紛争の地では、国連軍の力の限界も見せつけられた。「国際社会の集結度が十分でなかった」と明石康氏は指摘する。「政争に明け暮れて、日本はどこを向いているのか」との批判もあった。アメリカ政府の主導で、ともあれ和平でのスタートが切られた。民主的に選挙の実施や難民の帰還の支援に、今度こそ国際社会の結集が求められ、日本の国際感覚が問われよう。

「仮調印交渉後の争点」

次に調停後の争点に関してであるが内戦全体を通じセルビア、クロアチアの二国が立場を強化し、ボスニア側が交渉での得点にもかかわらず弱い立場に追い込まれたと伝えられている(ロイター通信、ワシントンポストも参照)。

[セルビア]領土面で見ると1991年発生の旧ユーゴ紛争中、セルビア共和国は何も失っていない。しかも、ボスニア内のセルビア人勢力地区が「セルビア人共和国」として国際的に認知され、ボスニア内に影響力を及ぼす土地を確保した。最優先課題である国際経済制裁解除も今回の合意で一時停止ではあるが、実現する見通しとなった。

[クロアチア]クロアチアも今回の交渉で得点を上げた。今年に入り、自国内のセルビア人戦力支配地に個所を制圧力、残る東スラボニアも今回の交渉

で遅くとも二年後に返還のメドが立った。

[ボスニア] これに対しイスラム教徒の立場は苦しかった。統一国家維持の主張は受け入れられたものの、国家は事実上「ボスニア連邦」（イスラム教とクロアチア人で構成）と「セルビア共和国」に二分されることとなった。しかも、三つの勢力の中で最大の人口比40%（91年国税調査）を持つにもかかわらず、合意での領土配分はクロアチア人（17%）と合わせて51%。さらに、隣の本国を持つクロアチア人の発言は強く「連邦」内部も弟分の扱いを受けている。対セルビア人軍事同盟の色彩の強かったクロアチア人との連携が、この合意で意義が薄れ両国の関係が悪化するとの観測もあった。

「ヨーロッパ連合（EU）の反応」

今回の和平プロセスで、面子をつぶされたと言われているヨーロッパ連合（EU）の反応は複雑であった。特にフランスのシラク大統領は、「和平への一歩ではあるが、和平そのものが実現したのではない」と米国主導型の合意には割り切れなさを示した。復興援助や平和維持活動の分担には、国連のガリ代表は積極的に国連が協力すると報道した。しかし、これらに関しての各論では欧米の不協和音も懸念された。第一ラウンドはクリントン大統領の勝利と受けとめられてた。しかし、第二ラウンド以降は予測はできないと当時は各紙でも伝えられた。再選のための外交実績づくりだとすれば、クリントン大統領はアメリカの将来に重い課題を残したとの見方もあった。

[1996年12月14日] この日、フランスのパリのシラク大統領府において、ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争の三当事国首脳が、和平協定に調印した。そして次の調停文書を発効した。

- (1)イスラム教徒とクロアチア人勢力の「ボスニア連邦」とセルビア人勢力の「セルビア人勢力」で構成するボスニアは、一つの国家として存続する。
- (2)ボスニア政府は、サラエボを首都とし、幹部会、二院制の議会、裁判所、

中央銀行を持つ。二つの構成体もそれぞれ幹部会、議会を持つ。(3)北大西洋条約機構(NATO)の指揮下に平和履行軍を創設する。(4)平和履行軍は停戦、兵力の引き渡しなど、今後の合意が履行されているかどうかを監視する。(5)各派は1995年10月5日の合意で始まった敵対行為の停止を順守し、いかなる攻撃も自制する。(6)議会、幹部会選挙を六から九ヶ月以内に実施する。(7)すべての難民、避難民は自宅に戻り、保証を受ける権利を有する。(8)旧ユーゴ国際戦犯法定が訴追した人物は、オランダのハーグへの出廷を含む法廷の命令に従わない限り公職に就くことはできないの七点であった。

「結 語」

民族問題の悲劇性を世界の人々に知らせたのが旧ユーゴスラビアの解体であり、ボスニア・ヘルツゴビナにおいてのセルビア人、クロアチア人、モスレム人であった。民族同士の衝突の過程で、民族浄化と呼ばれる異民族の排除と自民族の純化の動きが生じた。これが異文化交渉研究者のサスカインド等が説く「自民族主義」と呼ばれるものである。この結果、多数の難民が発生した。

柴宜弘や徳永彰三の研究によれば、旧ユーゴスラビアは多民族国家であり、旧ユーゴスラビア連邦といいボスニア・ヘルツゴビナ共和国といい、これまで歴史的に多民族共存の遺産を刻んできたが、こうした多民族共存の文化的フレームワークが社会主義の崩壊、国家の南北格差の拡大、それに民族主義政党の台頭の中で脆くも崩壊したのである。

バルカン半島のような地域においては、多民族の混住は不可避であり、それゆえに歴史的にはリージョナル・コンソーシアム(地域統合)や民族間の連携が模索されてきた。特にチト一大統領時代、旧ユーゴスラビアは多民族共存の模範的な実験場であったと言われていた。こうした地域で民族自決やネーション・ステートの建設が今後も追求されるとすれば、その結果は、今

日みられるような異民族の追放による民族浄化でしかありえないという見方が強い。

こうした民族自決の強行が多く犠牲と悲劇をもたらすことが明白となり、その意味でボスニア紛争は、民族自決という考え方を再検討することの必要性を提示しているようだ。ともあれ、1995年11月21日に米国、NATO（北大西洋条約機構）の主導により、米国オハイオ州のデイトンにおいてセルビア、クロアチア、ボスニアの関係首脳が参集し「デイトン仮和平合意」に調印後、四年近く及んだ内戦は一応解決ではなく「決着」した。この仮和平合意への突破口を開いたのは、クリントン政権の外交官ではなく元大統領のジミー・カーターのメディアーション力（調停力）であったことを明記しておきたい。

Memoir in English

On November 18th 1995, Bosnian leaders gathered in Dayton, Ohio and held marathon talks with Secretary of State Warren Christopher since Bosnia-Herzegovina's foreign minister had quit and an American spokesman declared that negotiations to end a 43-month war "remain balanced on a knife's edge."

A report released by Associated Press also spelled out amid speculation that a deal was within reach, to be sealed by President Clinton, but there was a stream of disclaimers from the State Department spokesperson who said, "We are still not the verge of an agreement."

Mr. Christopher and chief U.S. Mediator Richard Holbrooke took turns trying to bridge differences on key issues among the Serbian, Bosnian and Croatian delegations.

Their aim was a comprehensive accord, not a piece-meal framework agreement, to be initiated in Dayton, if the talks succeed and to be formally signed at an international conference in Europe.

Unresolved Issues

The unresolved issues were : (1) the scope of two proposed ethnic republics and (2) whether Bosnian Serbs, who launched the war in April 1992 after the United States and European Union recognized the former Yugoslav republic's independence, would gain control of Sarajevo, the capital.

Foreign Minister Muhamed Sacirbey declared that he was making

his own sacrifices and resigned by saying that Bosnian Croats should be given more authority in administrating a joint Muslim-Croat federation. The American-educated diplomat was also holding out for a strong central government.

A senior Bosnian government official said in Sarajevo that Sacirbey was dissatisfied with the talks. Burns said "we admire him," while another U.S. official, insisting on anonymity said, "It's more of a power play than anything to do with negotiations."

The leaders of Bosnia Herzegovina's warring factions struggled Sunday, November 19th to sort out disputed details of a plan to end Europe's bloodiest conflict in half a century, and worked against a U.S.-imposed deadline at Dayton's Wright Patterson Air Force Base in Ohio.

In a dizzying throw of the dice, Mr. Warren Christopher and his aide scheduled public ceremony for November 20th to either initial a peace treaty or admit that the 19-day conference had been a failure.

"The time for debate has passed ... and the time for decision has arrived," said Nicholas Burns, State Department spokesman.

"By violating a cardinal rule of international bargaining, which dictates that the parties must be kept talking as long as there is a chance for progress, Christopher set the stage for either the Clinton administration's greatest foreign policy triumph or its most humiliating failure."

One senior official told the press that there was little to be gained by prolonging the negotiation. "If we did not set a deadline, they'd be here until Christmas," he added.

While U.S. mediator, Mr. Richard Holbrook, reported that substantial progress had been made since November 1, Burns conceded: "one day last

week we thought we were making a lot of progress, but the next day things seemed to fall apart.”

On Sunday (November 19th), Croatian President Franjo Tudjman returned to Dayton to take part in the end of the talks. Before he left Zagreb, the Croatian capital, Tudjman told reporters that he anticipated a peace agreement.

On November 21, American mediators, ignoring a deadline they had set, kept Balkan leaders talking all day Monday — fending off an imminent failure and keeping the peace negotiations going for at least another day.

The talk ended for the day about midnight, but resumed on the 21st. Mr. Christopher, Secretary of State met repeatedly with Bosnian President Alija Izetbegovic, Serbian President Slobodan Milosevic and Croatian President Alija Izetbegovic, Serbian President Slobodan Milosevic and Croatian President Franjo Tudjman throughout another marathon day of discussions aimed at ending the Bosnian war, Europe's worst war in half a century.

In the afternoon, it was reported that the negotiators appeared on the verge of collapse because of territorial disagreements. Each negotiator had its plane ready for departure with loaded baggage. But by midnight, the planes were dark and the delegates continued talking.

President Clinton called Tudjman to urge him to try to break the impasse. The negotiations were foundering due largely to excessive territorial demands by the Bosnian Serbs.

Sticking Points in Negotiation

The main sticking point on the 20th (Monday), according to CNN news, was the division of the territory in Bosnia Herzegovina between the Muslim Croat federation and the Bosnian Serbs. The sides agreed in September 1994 to give 51% of the land to the federation and 49% to the Serbs, but there was no decision on how to split the territory. The major point in the dispute surrounded the strategic Posavina corridor, which connects Serb land in Bosnia-Herzegovina with Serbia. The Bosnian Serbs wanted to widen the corridor, which runs through land where Bosnian Croats have lived for generations.

Any broadening of the area would require the Bosnian Croats to withdraw from territory they hold.

The senior Bosnian officials insisted on concessions in the corridor that were clearly reasonable. But Serbs proclaimed they thought they had an agreement to widen it but that the Croats reneged at the last minute.

The Bosnian Serbs captured a narrow strip of land through Posavina at the beginning of the war in 1992 and "ethnically cleansed" it of non-Serbs in some of the conflict's most infamous atrocities.

The negotiation continued November 20th (Monday) long after the expiration of a 10 a.m. deadline Christopher imposed on November 19 (Sunday).

Mr. Christopher touched off a long day of negotiations that lasted 22^{1/2} hours, ending at 5:30 a.m. Monday (Nov. 20), when exhausted bargainers knocked off for a couple of hours for a nap and shower. The

talks resumed around 8 a.m.

Mr. Burns insisted on Nov. 20th (Sunday) that the deadline was a firm one and that the U.S. sponsors would make a public announcement at 10 a.m. regardless of the situation. Should agreement be reached, "a treaty would be initiated. If not, delegates would explain the reasons for their failure," stated Burns. However, a senior U.S. official admitted Monday said the deadline was a negotiation ploy designed to force the factions into making painful decisions.

Mediators decided, according to Burns, to keep the talks going as long as there was a chance for success. "Each of these three seems to want peace...As long as there is a chance to make peace, we will be there with them," said Burns.

On November 22, the comprehensive peace accord, which was reached after three weeks of marathon (roller-coaster) negotiations divided Bosnia into : (1) a Muslim-Croat federation ; and (2) a Bosnian Serb entity. The Washington Post wrote "The president of Serbia, Bosnia and Croatia on Thursday initiated a U.S. sponsored peace settlement for Bosnia, pledging to bring to an end a fratricidal 3^{1/2} -year war that has caused the deaths of nearly a quarter of a million people."

"This day will go into history as the end of war in the former Yugoslavia," Serbian President Slobodan Milosevic told the ceremony where the pact was approved. Milosevic, who unleashed a wave of nationalist fury through the country in 1991 with his vision of a "Great Serbia" said that they could be "no winners" in a civil war, "only losers."

President Clinton, announcing the peace accord earlier in the White House, made a statement that implementation of the peace settlement was dependent on the deployment of up to 60,000 NATO troops, which

includes 20,000 Americans, to police a 4-km-wide demilitarized zone between the warring parties. The President said with confidence "The parties have chosen peace. America must choose peace as well." Summing up what is likely to be the central theme of his campaign to persuade the American public to support the peace agreement. He said that the Republican controlled Congress, which has been deeply skeptical of the idea of sending U.S. troops, would approve the deployment plan.

As the Balkan leaders initiated the peace accord, the United Nations Security Council took steps to suspend economic sanctions against Serbian-led Yugoslavia and the arms embargo that applied to all six former Yugoslavia republics, including Bosnia.

Reports from London

Here let us take a brief look at how other news agencies interpreted the outcome of the Dayton Accord. The synopsis from the Reuters, for example, is as follows :

Reuters (London) on November 22, 1995 reported that U.S. and European leaders, their lives blighted by the war in former Yugoslavia for the past four years, poured out their relief and joy over the peace deal struck in the United States on Tuesday (Nov. 21). President Clinton expressed "The people of Bosnia finally have a chance to turn from the horror of war to the promise of peace... The president of Bosnia, Croatia, and Serbia have made a historic and heroic choice. Russia, often at odds with Washington and its European partners in the divisive squabbling that has marked the search for peace, hailed the agreement and said that the United Nations should lift sanctions against Yugoslavia

promptly.

Views of Yeltsin, Gali and Charette

How did Russian President Boris Yeltsin and the former U.N. secretary general Gali, and French foreign minister Herv Charette view the Dayton peace accord. Russian President Yeltsin highly praised the final outcome of the peace accord by stating "a big step was made toward a comprehensive settlement of the most tragic conflict in Europe since World War II." The former U.N. secretary general, Boutros Boutros-Gali was also pleased with the result and indicated "the U.N. would do all it could to help end the suffering and restore life to normal in war-ravaged areas. The accords announced in Dayton give us hope that peace can now become a reality in the war-torn lands of former Yugoslavia... The world should, at this time pay tribute to all those peacekeepers of the United Nations, both military and civilians, who at great personal risk helped contain and stabilize the situation until the warring parties could turn from war to peace," ... (We should notice that Gali also added that "(we should not forget that) Germany and Britain-nations that have joined the U.S., Russia, and France in trying to broker through the contact group — hailed the accord."

[NATO, which is preparing to take over from the U.N. as leaders of a 60,000-member force to implement a peace deal, said it is ready to go ahead. Troops could be in place less than 100 hours after the Paris signing ceremony.]

Foreign Minister Herv de Charette said in a statement to Parliament that "a final agreement among Bosnia-Herzegovina, Serbia and Croatia

would be signed formally at a conference in Paris in December.” and warned that ”peace has not been achieved in practice. The peace accord is fragile. The parties must, therefore, act in good faith from today to implement it in its entirety.”

Chirac was Not Pleased

President Jacques Chirac was not pleased with the way the peace negotiations went in Dayton, Ohio, as the negotiations were carried out under the influence of the United States—a big showdown for the Clinton administration. Mr. Chirac viewed the talks in Dayton as a first step towards achieving peace, yet he, at the same time, warned the public that real peace has not been realized.

The sentiment was echoed by European mediator Carl Bildt, who was present at the peace talks when he emphasized ”important as it is, it represents but the beginning of peace. We must all be deeply aware of the challenges and difficulties in the days, weeks and years ahead.”

As Roy Gutman of *Newsday* put it, in theory, the accords hammered out here during three weeks of intense U.S.-led talks preserve a single, multiethnic state, but they did skirt the entire question of military power.

As the author mentioned in the preceding article, the Dayton peace accord was construed as a demonstration of the broad and multinational resolve to ending the 4-year major international conflict. The notable mediators—Richard Holbrooke, Warren Christopher, and President Clinton—were in the limelight. However, the chief mediator who did underscore its cost much earlier and set the initial stage for the Balkan peace talks was none other than the former U.S. President Jimmy Carter.

Carter's hidden skill as a mediator and his shuttle diplomacy in the Bosnia-Herzegovina ceasefire negotiation paved the way for the Dayton peace accord in the final analysis.(The end of Part 2)

POST SCRIPT

[Bosnian War Chronology]

June 25, 1991 : Slovenia and Croatia declared independence from Yugoslavia. The Yugoslav army battled Slovenia for 10 days, then withdrew.

July 1991 : Croats and rebel-Serbs began warring in Croatia.

Feb. 29, 1992 : Bosnia-Herzegovina declared independence and the Bosnian Serbs declared a separate state.

March 1993 : Bosnian Croats and Muslims began fighting over the 30% of Bosnia not seized by the Bosnia Serbs.

April, May 1993 : The U.N. Security Council declared 6 "safe areas" for Bosnian Muslims : Sarajevo, Tuzla, Bihac, Srebrenica, Zepa and Gorazde signed an accord brokered by the United States.

January 1, 1995 : A four-month, nationwide truce began. Although it holds reasonably well, efforts to extend it failed and violence erupted again.

May 24, 1995 : When Serbs ignored a U.N. order to remove heavy weapons from the Sarajevo area, NATO aircraft attacked a Serb ammunition depot. In retaliation, Serbs began shelling the safe area.

July 11, 1995 : Serbs seized Srebrenica.

July 25, 1995 : Serbs seized Zepa, Serb leaders were indicted for genocide.

August 4, 1995 : Croatia unleashes a huge effort, retaking most of the land it had lost and sending up to 180,000 Serbs fleeing.

August 30, 1995 : NATO warplanes began a fierce air campaign against Serbs around Sarajevo. Serbs remain, however, until September 20.

September 8, 1995 : Foreign Ministers of Bosnia, Croatia and Yugoslavia agreed to the division of Bosnia into Serb and Muslim-Croat entities.

November 1995 : Leaders agreed to a settlement.

November 22, 1995 : Peace Accord was signed by the three leaders in Dayton, Ohio, United States.

December 14, 1995 : Bosnia-Herzegovina and Serbia officially announced the establishment of diplomatic ties as Balkan leaders signed a peace accord aimed at ending the Balkan's nearly 4-year-old ethnic war at Chirac's Elysee Palace in Paris.

参考文献・資料

1. A report released by Associated Press (Nov. 20, 1995).
2. Carter, Jimmy. "Keeping the Faith" (1982) (N.Y. : Bantam Book).
3. Chanteur, Janine. "From War to Peace" (1992) (Boulder, S.F. & Oxford).
4. Koengberg, Richard A. (1987) "Psychoanalysis of Racism, Revolution & Nationalism" (N.Y. : The Library of Social Science).
5. Kimura, Hiroshi. "Russian Way of Negotiating" (1996) (International Negotiation 1 (Kluwer Law International, Netherlands, pp. 365-389).
(木村 汎「ロシア式交渉法—国際交渉1」: クルア・ロー・インターナショナル, オランダ 1996年).
6. The Japan Times (Nov. 23, 1995).
7. 御手洗昭治「ボスニア停戦交渉とカーター元大統領のミディエーション力の一考察」(日本交渉学会誌, 1997年).
9. 西原 正「外交交渉」(有賀貞編「講座: 国際政治(2) 外交政策, 東大出版 1989年).
10. Reuters News (London : Nov. 22, 1995).
11. 柴 宜弘「ユーゴスラヴィア現代史」(岩波新書, 1996年).

12. Susskind, Lawrence. : "Breaking the Impass" (1987) (Basic Books).
13. 徳永彰三「旧ユーゴ地域稿模様の複雑さ：'97世界紛争・テロ辞典」(エコノミスト：毎日新聞社，1997年1月27日)135頁.&「真の平和はまだ遠い：ボスニア・ヘルツェゴビナのゆくえ」(公益産業研究調査会33巻，12/18/'95).
14. Zartman, W. (1989). "Getting to the Table" (Baltimore/London : The Johns Hopkins Press).
15. The Washington Post (Nov. 22, 1995, p. 1).
(ボスニア，旧ユーゴスラビアに関する資料に関しては，本学の徳永彰三教授に貴重な助言を賜った。記して謝辞を表したい。)

—本稿は，平成10年度の札幌大学研究助成により行われた共同研究成果の一部である。—